

魚のすむ田んぼでレンコン栽培 販売、ブランド化目指す



レンコンの種付けをする参加者＝鳴門市
大津町段関

鳴門の住民グループ

無農薬、ロコミで好評

魚のすむ田んぼでおいしいレンコンを作ろうと、徳島大学大学院の田代優秋特任助教(三〇)環境再生学Ⅱや住民らのグループが、鳴門市大津町のハス田で取り組んでいる。無農薬で育てたレンコンは、安全安心な商品として販売、ブランド化を目指す。

田代助教は、生物がすむ環境で採れた作物は成長が良いという仮説に基づき、昨年度から現地でも実証実験を行っている。

実験に併せて、農業と自然環境の共生の大切さを農業体験を通じて多くの人に知ってもらおうと、住民や大学生の参加を募り「自然再生型農業プロジェクト」を始めた。

田代助教の知人で県指導農業士齋藤倫子さん(六七)方のハス田五百平方メートルで、家族連れら六十人が今年初めての作業に汗を流した。

この日は、用水路と田の間を魚が行き来できるように三方所に魚道を作り、レンコンを種付けした。

六月には用水路の水の流れをよくするため清掃をしたり藻を切ったりするほか、七月には生き物観察、九月は昔ながらの足踏み水車も取り付ける。

齋藤さんによると、田に魚がたくさんすんでいけると、動き回って水がかき回され、水中に酸素が供給されるため、レンコンの成長を助ける。また、魚が田の中の雑草を食べるため、除草の手間が少なくなるという。

昨年収穫したレンコン二百キはロコミで評判が広がり完売。今年は作付面積を二・五倍にし、ブランド名も付ける。